

暗黒星

川崎ゆきお

夜道を猫が通り過ぎた。黒猫だ。
「暗黒星と呼ばれる男がいた」
「はあ」
「今の黒猫を見ただろ」
「真っ黒でしたね、暗がりじゃ気づかないですね」
「暗闇よりも黒い猫だと、どうだ」
「どうだって？」
「それが暗黒だ」
「暗くて、黒いわけですね。二度塗りですね」
「黒い塊の猫じゃなく、暗黒なんだ。真の闇なんだ」
「闇って、何もないんでしたね」
「そうだ。実体さえない」
「今の黒猫は実体がありましたね」
「暗黒は穴が開いているような感じだ」
「穴ですか？」
「黒いのではなく、穴が開いているんだ」
「それは怖いです」
「穴の中には何もない」
「ブラックボックスなんだ...」
「暗黒星だ。宇宙の穴なんだ」
「そういう人がいたんですね」
「みんなから暗黒星とあだ名されてた」
「暗愚とか...」
「暗黒だが輪郭はある。黒猫のようにね」
「課長はその暗黒星さんに酷い目にあわされたんですね？」
「心の闇とやらにまんまと嵌められた」
「闇だから、何にもないんでしたね」
「だから、心の闇もないんだ」
「ああ、そういう話、学生時代に読んだ覚えがありますが、忘れちゃったよ」
「問題はね...」
「はい」
「その闇に入っちゃいけないってことなんだ。その暗黒星はぽっかり口を開けて待っている。まるで誘い込むようにね」
「で、その暗黒星さんはどうなりました」
「今もいるよ、社内に」
「誰なんですか？」
「私の口からは言えないよ」
「ヒントをください」
「中身が何もないくせに、奥があるように見せかけるのが上手い奴だよ」
「輪郭だけってことですね」
「あ、妙な話をしてしまった。単なる愚痴だよ」

若い社員は、気になった。

「君のことじゃないからね」

「 」

了